

じぶん発見からはじめる志望理由書づくり

開催日時：2025 年 8 月 25 日
13:30～15:00

河合塾×NOLTY プランナーズ

～A I サポートで広がるキャリアの可能性～

第1部 基調講演

「自己理解を深めるための生成 AI 活用方法 ～生徒の進路実現を扶ける AI 対話～」

早稲田大学教職大学院

田中 博之 教授

大阪大学大学院人間科学研究科修了(学術修士)。
新しい時代に求められる教育手法の研究をおこなう。学校の
状況に基づいたコメントに定評があり、メディア出演も多数。



生成AIの活用

人工知能(Artificial Intelligence)の研究は 40 年ほど前にもブームになりましたが、当時は高いコンピューターを使って難しいプログラムを組んでやっと二桁の計算ができるといった程度のもので、学校教育に使えるようなものではありませんでした。それが 2023 年に無料版の GPT-3.5 を使ってみて、この間に様々な技術が開発され大きく変化していることに



驚きました。日常的な日本語が使えて、対話ができ、文章や動画、音楽も生成でき、プロンプトを工夫すれば、大学の研究者を上回るような知恵や推論能力を示すこともありました。今こそこれを教育に応用できると考え、この 2 年間に実践事例・活用事例を積み上げてきました。総合的な探究の時間をはじめとして、高校では探究的な学習が広く求められています。その際、生成AIは学習のパートナーや研究協力者として力を発揮することができます。活用のイメージや各教科・領域での具体的な事例については、研究所の web ページをご覧ください。 AI教育研究所(<https://ai-education.jp/>)

新学習指導要領では、知識・技能だけでなく、思考力・判断力・表現力、そして学びに向かう力、人間性という身につけたい資質・能力が明確にされました。生成AIの活用でも、情報を検索するとかスピーチの原稿の改善をするといった生成だけでなく、問題解決力や論理的・批判的思考力を育てることが考えられます。表現力の観点では、マルチモーダルエクスペリエーションと言われる高度な出力もできるようになりますが、自分らしいオリジナルな表現をする創造力の育成も大切ですし、自分のAI活用の特徴やプロセスを俯瞰して見る力も必要です。検索の支援や負担軽減のような「作業効率の向上」だけでなく、「学習効果の向上」、「創造力の向上」といったAI活用が考えられます。

進路実現力を育てる

生徒が志望理由書の書き方を知らないことを教員も生徒も困っています。志望理由書では、部活はこれをやりました、海外の研修でここに行きました、ボランティアをしました、といった事実だけ書いてもダメですよね。その事実に含まれている自分らしさや生き方といったものを明らかにしなければなりません。しかし今の高校生は、自分と向き合ったことがないのです。教科書や参考書とは向き合っていない、自分と向き合う自分学習のようなものがカリキュラムの中にはなく、自己理解につながっていないのです。それが志望理由書を書けない理由です。先生方は個別最適な学びを指導するにもやり方がわからないし、担当する生徒の数も多くて一人一人の志望理由書を丁寧に添削できず、働き方改革とも矛盾します。理想はあるけれども現実的には難しいというところで、生成AIを活用して質の高い受験対策につなげられないかと研究を始めています。

生成AIを使うと、志望している大学の情報や合格体験記、効果的な勉強方法などをまとめて整理してもらうことができます。過去問の解法を丁寧にわかりやすく順を追って教えてもらったり、類題を作ってもらったり、など力を借りることができる時代が来ています。私たちが考えなければいけないのは、生成AIで様々な情報を整理収集しながら、あるいは志望理由書を書きながら、面接試験にも耐えられるくらいの非認知能力を育てていくことです。そのときにキーワードとなるのは、自己理解を深める自己探究力(セルフインクワイリー)です。粘り強く自己と対話して、自分を深く知り、理解した上で、面接で即答する力があるかが問われます。面接者は当意即妙に答える裏にある非認知能力を見ているのです。

受験対策(面接試験)で育てる力



自己探究の深化と自尊感情の醸成

自己探究力は教科学力のベースにもなります。学業・スポーツ・特技などで、得意なことや苦手なことだけではなくさらに深く自分を知っていくと、前向きに取り組む態度も育つと仮説を立てています。こんな経験や失敗をした、うまくいかなかったけれどなんとか頑張った、という体験を重ねて克己心や粘り強さを養うとともに、それらを自分の中で価値付けていけば、難しいことにも取り組み乗り越える勇氣、自尊感情につながります。探究的な活動で自己を分析し進路展望を明らかにしていくことで、自己創造的な進路の見方が深まります。



自己分析のためのアンケートなども、自己探究・自己理解の支援に役立ちます。アンケートに回答する際に自己内省をします。回答すると結果がグラフなどで返ってくるような、結果が可視化されることも重要です。そこからまた自分の得意不得意や向き不向きなどを考え、自己理解を深めていけます。可能であれば学年に一回など繰り返し行くと成長・変容がわかりやすいです。志望理由書の作成支援にAIを使うこともプロセスは同じです。質問に答えることで自己探究・自己理解が深まり、面接にも対応できるようになります。セルフアセスメントと生成AIのチャットボットをうまく活用すれば、生徒が自己理解を深めていくサポートができ、教科学力と非認知能力を車の両輪として育てていくことができます。

志望理由書を面接対策に繋げる視点

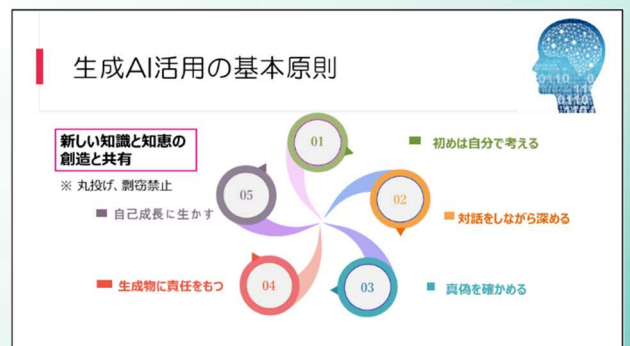
大学の入学試験の面接では、志望理由や大学で学びたいことなどの基本的な資質、個性、キャリア展望などが聞かれます。このあたりは誰もが想定し、学校でも練習しますよね。でも、自己理解・自己探究ができていない生徒でないと、パーソナリティや適性を見る質問には即答できなくなります。経験とその意味付けや価値付け、自己成長への貢献など、少し高度なことも質問されます。こういった練習をしないと本当の進路実現にはならないわけです。

誤解していませんか？ 生成AIに丸投げ？

- ・生成AIに丸投げして、志望理由書を書いてもらおう！
- ・生徒も教員も楽になる！
- ・生徒の自己理解も自己探究も深まらなくていい？
- ・代理執筆ではなく、自己探究の支援を！
- ・適切で多段階の対話を通した探究支援が大切！
- ・生成AIは生徒の自己探究の適切な壁を作る

志望理由書も、書けば終わり、出せば終わりではなく、志望理由書を書きながら経験や体験を価値付け、納得感や自信を持っておかないと、面接官の前で堂々と話ができないですね。こういった生成AIやチャットボットを使うのは丸投げじゃないかとか、楽になりすぎて思考停止になるんじゃないか、また、危ないから使わない方がいいというような意見も時々聞きます。丸投げをして代理執筆してもらえというのは誤解で、チャットボットはかなり多くの質問を投げかけてきます。対話を通じて自己探究をして、質問を一つひとつクリアしていかないと志望理由書が書けません。生成AIは適切な壁を作り、負荷をかけた練習のサポートをしてくれるのです。

このあと紹介のあるNOLTYスコラ 副担任 mirAI(以下、副担任 mirAI)は、楽に答えられる質問だけでなく、ちょっと考えないとわからないような質問も出てきます。対話しながら考えることによって深掘りが進む、そのことに教育的意味があります。ソクラテスの問答法のような感じで、気付きを促す質問が投げかけられ、温かく優しく励ましてくれて、短い文章をいくつか積み重ねていくことで、最終的に志望理由書ができあがります。AIは候補やアイデアは出してくれますが、文章を全部出してくれるわけではありません。また、個人情報収集されないよう、APIという仕組みで安全性が確保されています。生成AIは叱ったり怒鳴ったりすることはなく、ペースランナーとして推敲を支援してくれます。必ず初めは自分で考えて、対話をしながら深めていって、最終的に進路実現力、自己成長につながるものです。効果が出るよう、このあたりをうまく工夫しています。生成AIの適切な使い方や活用法については書籍も出しています。高等学校における探究的な学びの支援を考えると、環境問題、国際理解、ボランティアなどは大切です。そして、探究には自己探究も入ってきます。最終的には自己理解、自己探究ということを考え、今後も取り組んでいただけるようお願いいたします。



Q. 自己理解を深めるために日ごろから心掛けた方がいいことはありますか？

経験や体験について、学期に1回くらいで良いので振り返り、どんな成長があったかということ言語化して残してほしいです。それから、大学に入って貢献できること、長所や能力や意欲についても、面接練習としてAIと話し合ってログを残しておくことができます。ロングホームルームなどで時間を作って記録を積み上げておくと、志望理由書を作る時の材料にできます。

Q. 学力があるのに体験がなく志望理由書が書けない、合格できないという問題についてはどうお考えですか？

面接をしていると、体験をしている子は多くいてそれだけでは差がつかない状態です。体験がない子は確かに不利ですが、留学など大きなものである必要はありません。公的な安価な教室などもありますし、周囲の人との関わりから学んだことでもいいです。意義付け、意識付け、価値付けの方が大事で、意識をして積み重ねていくということだと思います。

学びみらいPASS × 副担任 mirAI 体験レポート

神奈川大学附属中・高等学校 中川 甲斐 先生 ・ 小林 直樹 先生

神奈川大学附属中・高等学校は横浜にある完全中高一貫の共学校です。1学年は6クラス編成で、高校2年生からコース制としています。以前は文系理系3クラスずつぐらいでしたが、近年は文系2クラス、理系4クラスぐらいの割合になってきています。附属校ではありますが神奈川大学に進学するのは10人程度で、国公立大学、海外大学など進学先は多様です。総合型選抜を受験するのは平均するとクラスで2～3人で、推薦書を書いたり志望理由書を指導したりすることはあまりない学校でした。けれどもこのところ、総合型や国公立をはじめとした学校推薦型にチャレンジをする生徒も増えてきています。

学びみらいPASSを導入した理由のひとつに、教員の年齢分布の問題があります。開校から40年が経ち、これまで中心となっていた教員が定年を迎え退職し始めています。結果、進路指導など学校のやり方がうまく伝承されないまま若手がたくさんいる状況になりました。時間をかけて若手を育成していく余裕もないし、経験則と経験値でやっていくわけにもいかない中、数字として信頼できるものを探していた時に学びみらいPASSに出会いました。春先に検査を受けてすぐに結果が出るので、最初の面談のときに生徒のことをある程度把握して話をするのができ、生徒の引継ぎにも活用できると思っています。また、昨年「生徒が主役の三者面談(SSS)」という取り組みを始めました。目標や頑張ったことを保護者に対してプレゼンするという試みですが、頑張ったことの結果が数値としてある程度見えるといいと思っています。導入はかなり急ピッチで進めましたが、教員に対して押し付けにならないよう、受験の終わった高校三年生に協力してもらってデモ動画を作るなどして、こうやればできそうかもしれない、という雰囲気を作って導入しました。

副担任 mirAI の導入には、面接指導の質と生成AIの活用の大きく2つの理由があります。従来は、志望する生徒が担任のところに相談に行き、担任が志望理由書の添削指導をし、進路部が生徒と面接指導教員をマッチングして面接指導を開始するという形でした。ここで、担任による指導のムラがあったり、志望理由書の出来によって面接指導が開始できず時間のロスが生じたりしていました。指導の水準をキープしたい、志望する生徒は増えてきている、という中、今までであれば教員の熱意でカバーをしていたかもしれませんが、働き方改革に伴う時間の制約もあります。生成AI活用を含めた学内のICT教育推進・DXを加速させる必要もあり、展示会等で情報収集をしている中で副担任 mirAI に出会い、今年度から試験導入をしました。

7月上旬に副担任 mirAI を実際に使ってみる体験会及び授業を実施しました。対象は、高校三年生は実際に志望理由書を使う予定の生徒、高校二年生は全員の合計267名です。手元に学びみらいPASSのスコアシートを置いて、タブレットで入力をしていきました。自分の強みや自分がどういう存在かということに関してAIの質問に答えていくわけですが、学びみらいPASSの結果があることで、自分は意外とこういうところが優れているんじゃないかと気づいたり、こういう経験をしてこんな学びを得てスコアが上がりましたとストーリーを作ることができたのではないかと思います。AIアドバイスのコーナーでは、「こういう内容を含めると良い」ということをAIが提案してくれます(事例1)。書いていくと、結果的に文章ができあがります。部活動など自分が明らかに頑張ったことがある場合にはそれを武器にして書くと、この能力が大学に入ってからこういう場面で役に立つ、という話になっていくと思います(事例2)。スコアから自分の頑張りが形になっていると確信を持てると、自己を深掘ってみたり客観化してみたりするきっかけになり、書きやすいのではないかと思います(事例3)。

比較をすると、高校三年生と高校二年生は明らかに違いがあります。すごくいい生徒でも、行きたい理由を「近いからです、他にありません」と短文で済ませてしまうようなことがあります(事例4)。まだ受験が自分ごとになっていないところがあると思います。これは高校二年生の夏の時期だからだとは思いますが、ここから部活や勉強を頑張って、5年後、10年後の自分を想像したときにその世界で活躍する自分が描けるように、考えさせていく必要があるわけです(事例5)。動機を言語化することは難しいと思うのですが、そのようなチャレンジをしていくとAIとのチャットもスムーズに進むようです。副担任 mirAI では質問に答えていくと進み具合の数字が変わるのですが、答えてもずっと0%のままということもあって結構増えにくいんですね。でもそこを耐えてやっていくのが壁を乗り越えることなのだと思います(事例6)。質問に対してどう答えるか、本当に自分が

従来の本校の指導と喫緊の課題

- 【課題・弱点】
1. 学校としての基本フォーム不在/"学年・担任ガチャ"
 2. "経験則・経験知"の不足あるいは断絶
- 《教員の年齢分布の歪さ》
3. 時間をかけて"育成"する猶予なし
 4. 今後も新採用は続く

- 上記課題に対応し、誰が担当しても「最低ここまで」という指導の絶対防衛ラインを獲得する
- 獲得した経験知を客観的な視点からチェックし更に洗練させる

KU KANAGAWA UNIVERSITY JUNIOR AND SENIOR HIGH SCHOOL

生徒が主役の三者面談 (SSS)

- 生徒
- ・担任と保護者に対して、年度の目標や学んだ内容、努力したこと、今後の課題などをプレゼンテーション。
 - ・自らの学修の状況、思考や行動を客観的に認識し、より高次の学びへと進んでいく力をつけることが目標。
- 担任
- 保護者
- 生徒の成長を確認し、ポジティブな質問・助言をすることで、生徒の学びを支援。

KU KANAGAWA UNIVERSITY JUNIOR AND SENIOR HIGH SCHOOL

集計結果と分析

高3 22/22名 回答 100%
高2 154/246名 回答 62.6%

- 高3：肯定的意見多数。
→ 現実を直視し「自分事」となっているため。「タイバ」に対する意識が高い。

- 高2：否定的意見が高3より多い。
→ 受験(志望理由書)がまだ「他人事」の状態。
→ 表面的コメント(怠惰、ワガママ、世間知らず)多数。
→ 動機付け、視野を広げる機会としての活用にマッチ

KU KANAGAWA UNIVERSITY JUNIOR AND SENIOR HIGH SCHOOL

そこに行きたいのか、社会で活躍したいのか、ということを言葉にして紡ぎ出したときに、きっと勉強のモチベーションにもなるのかなと思っています。頑張ってきたことが学びみらいPASSのスコアの変化につながったと自己理解し、その楽しさや面白さが興味のある学問につながっていくのならとても良いと思います(事例7)。

教員側の画面では、担当する生徒以外の進捗状況も見えますし、担当者がつけたコメントも見ることができます。前の先生とどういうやりとりをして今のものが出来上がっているのか見えるので、これは非常に良いと思います。書いたものを原稿用紙のような見た目で確認することもできます。日本語の表記といったものはAIが指摘してくれるので、そのレベルのチェックからしなくていいのはすごく良いです。いいか悪いか微妙なところでは、ある程度ルールに乗った展開のものが出来上がる気もしています。流れに沿って添削をするのは楽ですが、全部がそうだったらつまらないという気持ちもあります。まだわかりませんがこのあたりがクリアされて、インターフェースの少し使いにくい部分も改良されていくといいと思います。

体験会の際にアンケートもとっています。高校三年生は非常に肯定的な意見が多かったです。いわゆる「タイパ(タイムパフォーマンス)」を生徒は意識していて、それに見合う形になっているのが肯定的な意見につながっているようです。高校二年生の方はまだ他人事で、やらされている感じがして、一部の生徒は、AIが作ってくれるんでしょ、というスタンスのようです。そんな楽なものではないのですが、そのあたりのズレからちょっと否定的な感じになっているかと思います。こちら側としては、やはり動機付けを意図して導入したく、視野を広げる機会として用いるというような伝え方がいいのではないかと捉えています。また、高校二年生と三年生で継続して利用して変化を蓄積し、どの時期にどんな変化が起こるのか、男女や属性による違いなども分析を加えて使っていきたいと思っています。

動機の言語化を通して、本当に自分がそう思っているのかを確認し、教員側からは、書けないんだったらまだ違うでしょ、と伝えていくことで、絶対ここに行きたい、だから頑張る、というような強い精神性を持った受験生にしていきたいと思っています。そういう意味で、副担任 mirAI は進路実現に向けたモチベーターになるのではないかと考えています。また、AIとの対話をストックできれば、どういった声掛け、体験が提供できるか考えられると思いますし、受験結果などのデータと掛け合わせることで、感覚ではなくデータでの進路指導ができるようになると思っています。学びみらいPASSのスコアと成績の上下とか、さまざまなものをクロスで見えたら、タイプ別の指導方法を確立し、標準的で高いレベルの指導ができる学校になると思っています。これまでの紙での取り組みでは、書いて終わりで活用されずもったいないものもあったので、DX化にも関心をもって取り組んでいきたいと思っています。

Q. 志望理由書を見る中で、生徒の「経験」についてどのような印象がありますか？

恵まれた家庭環境で特別な経験をしている場合もありますが、よくそこに気が付くね、という身近な経験を書く生徒もいます。学校行事の経験のみで合格した生徒もいますし、経験にどう価値を見出すかが重要なのだと思います。(中川先生)

行事などでもいろいろな体験をさせるようにはしていますが、良い志望理由書を書けている子は、自分で探してきた学外の活動経験が多いようにも思います。お金があまりかかるようなものでなくても、中身で引き付けることができている。見栄えばかりを意識する必要はないのかなと思います。(小林先生)

同日開催

「副担任 mirAI」体験会 & 交流会

セミナー終了後、同会場で「副担任 mirAI」の体験会を実施しました。

先生方からは、「AI対話で指導がかなり楽になりそう。面接指導にも良さそう。」「AI対話を 70%まで実施。『かなり大変!』と思ったのと同時にしつこく聞く必要性も感じた。」「生徒がAIと対話しながら考えを深めていける点は、進路指導の負担軽減につながりそう。」「指定校推薦や面接練習の場面で有効に活用できそう。」といったご感想をいただきました。

アンケート結果【高3】

5. 肯定的回答②

- ・一部AIとかみ合わない部分もあったが、質問を繰り返すことで改善されたから。
- ・自分の志望動機を深める理由をAIが考えて質問をしてくれるため、新しい視点で自分を見つめ直すことができるのが魅力だと思った。
- ・自分が考えていたことをAI対話を通して言語化することができたから。
- ・一気に文章にまとめるのは難しいので、段階を踏んで質問を投げかけてくれてわかりやすかった。
- ・AIで添削や質問をしてくれるというのは非常に新鮮であったから。

KU KANAGAWA UNIVERSITY JUNIOR AND SENIOR HIGH SCHOOL

アンケート結果【高3】

5. 肯定的回答④

- ・AIがチャット形式で自分の強みなどを質問形式で聞いてくださるおかげで、自分の考えもまとめやすく、AIも自分の回答に沿った質問をしてくれるので、自分の考えについて深掘りができるだけでなく、新たな観点からの考えも深まると感じたからです。
- ・不備がないため、対人との会話と比べ記録が取れる他、時間差を問わないのが良いと思った。

KU KANAGAWA UNIVERSITY JUNIOR AND SENIOR HIGH SCHOOL

アンケート結果【高3】

7. 講義の中で印象に残ったことや、今後意識したいこと、がんばりたいことを教えてください

- ・もう少し自分の特徴を振り返ってみようと思った。
- ・自分のことをもっと上手く言葉にできるようにしていきたいと思った。
- ・自分自身の考えを言葉にすることを意識したい
- ・早く作成できるように頑張りたいです
- ・自分自身で自分を見つめることは一人ではできないと思ったので、これを活用して頑張っていきたい。
- ・自分の強みや経験をあたためて見直していきたい。
- ・合格目指して自分の強み・気持ちが変わるような文章作りができるようにしたい

KU KANAGAWA UNIVERSITY JUNIOR AND SENIOR HIGH SCHOOL

アンケート結果【高2】

5. 肯定的回答(抜粋)

- ・どんどん質問をしてくれるので、自分の意見をより詳しく書けた。
- ・自分一人で志望理由書を書くことは難しいことなのでサポートしてくれる人がいるととても心強いと思ったから。
- ・AI対話のところで、今まで自分で考えてこなかったことも質問され視野が広がるが、やることは質問に答えていくだけで良かったから。
- ・AIでの対話だと緊張しなくて良い
- ・AIの返答がわかりやすい
- ・AIのロードの時間がほぼなく、スムーズに回答できるところが凄く良かったです。
- ・分かりやすくて聞いたらもっと丁寧に噛み砕いて教えてくれたから

KU KANAGAWA UNIVERSITY JUNIOR AND SENIOR HIGH SCHOOL

アンケート結果【高2】

5. 否定的回答(抜粋)

- ・項目が多い
- ・AIでやる必要がない
- ・同じような質問を何回もされる
- ・初期設定が長すぎる大学のホームページから抜き取ってきて欲しい
- ・質問がよくわからない時があった
- ・主語がない質問や進捗度がおかしいことがあった

KU KANAGAWA UNIVERSITY JUNIOR AND SENIOR HIGH SCHOOL